

第 16 回 鳥海ダム環境影響評価技術検討委員会 技術的助言

日時：令和 7 年 2 月 5 日（水） 14：00～16：00

場所：秋田 JA ビル 8 階 大会議室

1. 令和 6 年度 鳥海ダム環境モニタリング調査結果に関する技術的助言

①水質

| No. | 委員名 | 技術的助言 | 回答及び対応方針 |
|-----|-----|---|---|
| 1 | 金委員 | <p>大腸菌数は、いくつか環境基準値を超える値が現れているが、糞便性大腸菌数とも相関が見られているため、調査データには問題がないと考えている。</p> <p>大腸菌数は調査が始まったばかりの項目であるため、今後もデータを蓄積していただきたい。高い値に注目するのではなく、年間を通じてどのように推移しているのか、という観点から評価していただきたい。</p> | <p>大腸菌数は、継続的な調査を進めていく。蓄積したデータの評価については、委員へ報告・相談しながら検討していきたい。</p> |
| 2 | | <p>秋田県では令和 7 年度より有機フッ素化合物のモニタリングが始まる。健康項目や水道用水の項目に位置付けられるため、他県や他ダムの動向を踏まえて、対応を検討していただきたい。</p> | <p>有機フッ素化合物は、成瀬ダムや秋田県に聞き取りを行った上で、委員へ相談しながら来年度以降の対応を検討していきたい。</p> |
| 3 | | <p>L-Q 式(流入負荷量式)について、ダム下流の調査地点である袖川は、安全上の問題で見直しが必要な状況であることは承知している。継続性の観点から同地点で観測することが望ましいが、再検討する場合、調査地点は原則としてダム直下でなければならないと考える。検討が非常に難しいが、慎重に検討を進める必要があると考える。</p> | <p>袖川観測所は、安全上の問題で出水時の観測が難しいが、代替地点を設定できるか、もしくは、同地点で観測を継続できるかという点は、委員へ相談しながらしっかりと検討・判断していきたい。</p> |

②動物、生態系上位性（陸域）

| No. | 委員名 | 技術的助言 | 回答及び対応方針 |
|-----|------|--|--|
| 1 | 杉山委員 | 令和6年度の調査で初めてアユの放流個体が確認された。放流個体が増加したということは、相対的に天然個体が減少したと考えることもできる。 放流個体と天然個体の確認状況に対する評価は、今後も議論していきたい。 | — |
| 2 | 加藤委員 | サシバは、令和6年に雛が哺乳類に捕食されたため繁殖失敗したという報告があったが、来年も同一営巣木で繁殖活動を行った場合、再度捕食される可能性がある。 哺乳類による影響であるか確認するため、夜間撮影が可能なトレイルカメラを営巣木周辺に設置していただきたい。 | 令和6年と同一営巣木でサシバが営巣する兆候が確認された場合は、トレイルカメラを設置し、哺乳類が繁殖に影響しているか確認する。 |

③植物

| No. | 委員名 | 技術的助言 | 回答及び対応方針 |
|-----|------|---|-------------------------|
| 1 | 沖田委員 | 移植植物は、種類や移植年によって移植後の生育状況に違いが生じているが、引き続き保全に向けた対応をお願いしたい。 | 移植植物は今後も調査を継続し、経過を報告する。 |

④湿地環境の整備状況

| No. | 委員名 | 技術的助言 | 回答及び対応方針 |
|-----|--------|--|---|
| 1 | 沖田委員 | 湿地環境整備地は、明るい湿原にしたいと考えている。湿地環境周辺に生育するスギ植林はできるだけ伐採していただきたい。 | 湿地環境整備地周辺のスギ植林については、日照の確保を目的とした伐採を検討している。用地範囲も考慮しながら対応していきたい。 |
| 2 | | 湿原タイプは、現時点でガマの生育が確認されている。完成後の湿原タイプは、ガマが群生しないように留意していただきたい。 | — |
| 3 | 小笠原委員長 | 湿地環境は、既存のダムの前例を見ながら、良い方向にもっていくように検討していただきたい。 | — |
| 4 | 田中委員 | 保全対象種の中にハンノキを寄主とする種がいるため、湿地林タイプでは、小規模でもハンノキ林が形成されるようにしていただきたい。樹木の生長には時間がかかるため、長期的な視点で造林計画を進めていただきたい。 | 湿地林タイプは、スギを伐採した後にハンノキ等の食樹を移植することを視野に入れ、整備を進めていく。 |
| 5 | | 保全対象種のアカハライモリは、湿地環境整備地へ自ら移動し定着することを想定しているが、既知の本種の生息地と湿地環境の間に乾燥した環境が広がっていると自力での移動が難しくなる。生息地からの移動ルートを想定した上で、障壁が無いことを確認できると環境保全措置の裏づけが強くなると考えられる。 | アカハライモリについては、生息地や湿地環境周辺の状況を見ながら、自力で湿地環境に移動できるか、確認する。 |

⑤生態系典型性（河川域）

| No. | 委員名 | 技術的助言 | 回答及び対応方針 |
|-----|------|--|---|
| 1 | 杉山委員 | <p>河床材料の調査結果は、詳細にまとめられている。前回(令和3年度)調査と比較して河床材料に変化が見られているため、魚類の生息・繁殖環境への影響を懸念している。今回の調査結果では、河床材料の変化のみに着目して評価しているが、生物の生息への影響は留意する必要があるのではないか。</p> <p>大型礫の減少や河床の岩盤化は、カジカの産卵環境への影響が懸念される。</p> <p>河床材料の変化傾向を把握するためには、今後もデータの蓄積が必要である。</p> | <p>工事期間中のモニタリング調査は、令和6年度で2回目である。今後も継続的に調査を実施し、河床材料の変化傾向を把握する。</p> <p>環境影響評価書では、ダム直下流において河床の粗粒化が進むが、それ以外の下流域については、大きな変化は想定されないという予測結果となっている。</p> |
| 2 | | <p>河川横断測定の結果では、測量断面における早瀬・淵の変化がしっかり整理されている。河床材料の変化は、生物の生息に影響を及ぼすため、特に留意してとりまとめていただきたい。</p> | <p>河床材料は、出水の影響も見ながら、生物の生息環境として変化を整理し、データを蓄積する。</p> |
| 3 | 田中委員 | <p>河床材料が変化した場合、底生動物は造網性のトビケラ類の幼虫が特に影響を受ける。モニタリング調査では、造網性トビケラ類に着目したとりまとめや、出水後に緊急的な調査を実施し変化を把握することも検討いただきたい。</p> | — |

2. 今後の環境モニタリング調査計画に関する技術的助言

①令和7年度 モニタリング調査計画

| No. | 委員名 | 技術的助言 | 回答及び対応方針 |
|-----|------|--|-------------------|
| 1 | 金委員 | 湿地環境モニタリング調査は、こういった項目を物理環境として位置付けるか整理した上で、調査を実施するとよい。 | 物理環境の調査項目は整理する。 |
| 2 | | イトモ等の沈水植物を移植することを考えると、池沼タイプは水循環の条件（流水機能の維持）を検討してもよいのではないか。 | 水循環が把握できる調査を検討する。 |
| 3 | 田中委員 | 湿地環境モニタリング調査について、昆虫類のライトトラップ調査は、ボックス法ではなく、確認精度の高いカーテン法で実施していただきたい。 | 承知した。 |